

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1/2)

研究題目	北インド古典音楽の即興演奏における創造性—経験的獲得と指導的学習の結実としての演奏実践	報告書作成者	丸山洋司
研究従事者	丸山洋司		
研究目的	<p>本研究は、主に北インド古典音楽を研究対象として、即興演奏を身につけるプロセスを総合的に解明し、即興的な演奏における創造性とは何かを明らかにすることを目的として行われた。即興演奏を身につけるプロセスに関しては、大きく二つの見方がある。文化人類学的なアプローチに重きを置く研究者は、即興の技術は指導することが不可能なものであり、経験を通して獲得されるものであることを強調している。一方で認知心理学を専門とする研究者は、指導的な学習のなかにも即興的な実践を促す要素が含まれている点を強調している。この二つの主張は、どちらか一方の主張が正しいという訳ではなく、それぞれの主張に一理あると思われる。したがって即興演奏を身につける過程についてより総合的に理解するためには、指導者—学習者の学習実践や音楽活動をつぶさに観察することを通して、両者がどのような形で即興的な演奏実践に結びつくのかについて考察する必要がある。そしてこの点を十分吟味することが、一般に「靈感」などといった神秘的な能力としてとらえられがちな即興的に演奏する時の演奏者の創造性を明らかにするきっかけになる。本研究で私は、近年の音楽学の研究成果を踏まえつつ、即興演奏の実践を経験的獲得と指導的学習の結実として総合的にとらえなおすことによって、即興的な創造性とは何かについて考察した。</p>		

研究内容	<p>本研究では、研究者自身の約十二年間の北インド古典音楽の学習と演奏の経験に基づきながら、以下の二点について考察した。</p> <p>第一点目は、打楽器との練習や共演による即興的実践の経験的獲得の過程を精緻に考察することである。北インド古典音楽の即興演奏は、旋律を担当する奏者とリズムを担当する打楽器奏者が演奏中に様々なやりとりをすることを通して生成する。そのようなやりとりの中には、リズム、アクセント、音色などの要素を相手の演奏に同調して変化させて提示する様々な技術が含まれる。本研究では、今まで私自身が打楽器奏者と練習あるいは共演した時の録音を分析対象として用い、どのような即興的なやりとりの技術が存在するのかを明らかにした上で、それらの技術をどのような練習の過程で身につけたのかについて分析した。</p> <p>第二点目は、指導的学習と即興演奏の実践との結びつきに関する考察である。昨年度の研究では、指導者が伝授するターンと呼ばれる短い旋律句の反復練習が、自動的な演奏実践につながる点を指摘した。しかし実際の指導者—学習者の指導的学習の中には、ターン以外にも様々な旋律句、装飾法の学習が含まれている。また手の形や姿勢など、身体のあり方についての適切な指導が、より高度で洗練された即興演奏の基礎にあることも注目すべき点である。そこで本年度の研究では、十年間の教習時の録音・録画資料や指導者が作成した楽譜資料に基づいて、教授内容に関してより詳細に明らかにし、そのような教授内容が、即興的な演奏実践に結びつく過程について分析した。</p>
------	--

本研究プロセスの詳細を以下に記述する。

本研究は即興演奏における創造性とは何かについて、次の2つの作業を通して明らかにした。

①まず指導的学習の内容を次の手順でまとめる。2012年五月と六月の二ヶ月間に、私自身が約十年間にわたってシタールを学習した過程を、レッスン時の録音資料や指導者が作成した楽譜を参照しながらまとめ、どのような音楽素材をいつ頃、どの程度学習したのかという点を明らかにする。

②次に打楽器との練習や共演における即興的な演奏実践の経験的獲得の過程について、自分自身が演奏する様子を撮影した映像資料を用いて分析する。その際に①で作成した資料と照らし合わせながら、演奏プロセスの中に学習した素材がどのようにあらわれてくるのか、またそれらを演奏時にはどのように変化させて用いているのかについて考察する。

①と②の作業を通してとりまとめた研究成果を、私は九月十日から十三日に、Centre for Musical Performance as Creative Practice (CMPCP)主催でイギリスのオックスフォード大学で行われる国際音楽会議「即興に関する視座 Perspectives on Musical Improvisation」で発表した。この国際会議において、様々なジャンルの音楽における即興的な演奏実践についての研究にたずさわる研究者と意見交換を行うことができた。